

100周年記念寄稿

上智大学経済学部の25年

経済学部 経営学科
小林 順治

25年間は、四半世紀と呼ばれる。一世紀を基準とした言い方である。人類の歴史という観点からは、ほんのわずかな時間に過ぎないかもしれないが、ひとりの人間の生涯にとっては、かなり長い時間である。

上智大学創立時の商科に起端をもつ経済学部が1988年に75周年を祝ってから四半世紀が経過し、2013年には上智大学創立100周年を盛大に祝うと同時に、経済学部関係者が挙って経済学部の100周年を喜び合った。

私は、75周年と100周年の両方の祝賀の機会に参画する幸運に恵まれた。

この25年間に、経済学部では実にさまざまな出来事があった。それらの出来事が経済学部の75年の歴史と伝統の上に積み重ねられ、100年の歴史と伝統が形作られている。その出来事のひとつひとつには、無数としか表現し得ない多くの学生、教員、職員が関わってきた。これらの人びとが、経済学部の先人たちが築いた歴史を継承し、よりよい伝統を造出してきたのである。

この25年間に経済学部で起こった出来事の全貌を把握することは、一個人がなし得ることではない。私が経済学部の四半世紀を顧みた時、心に浮かんでくることは、私自身が経済学部で実際に体験した出来事である。それが、私にとっての、75周年から100周年までの間の上智大学の経済学部である。

I 嬉しかったことと悲しかったこと

経済学部の75周年を祝ったことは、鮮明に覚えている。

それからの25年間に私が実体験したことを思い出そうとすると、無数の出来事の細部が忘却の彼方に消え去っていることに気付く。しかし、その詳細を思い出すことができなくとも、その時の感情が強くよみがえってくる出来事はたくさんある。

体験には、必ず感情が伴う。今、思い返してみると、この25年間に限らず、私が学生として入学した1969年からの上智大学での生活では、嬉しかったこと、楽しかったことが圧倒的に多く、悲しかったこと、辛かったことはほんの数える程しかない。確かに言えることは、嬉しかったり、楽しかったりした思い出のほとんどは、私がゼミの学生たちと一緒に体験したことによるものである、ということである。嬉しかったことについては、その感情だけは心に残っているが、その事実の詳細はほとんど消え去っている。それに対し、悲しかったことは、その時の情景をまざまざと思い浮かべることができる。

中でも特に悲しかった出来事は、三つある。一つは、経済学部75周年に先立つ1986年に、本学の学部、大学院を通じて、経営学、特に経営組織論のご指導をいただいた恩師、高宮 晋先生が渡航先の上海で急逝されたことである。二つ目は、同じく学部、大学院を通じて、産業社会学のご指導をいただいた、私がもう一人の恩師と仰ぐ尾高邦雄先生が1993年に逝去されたことである。三つ目は、私のゼミの先輩であり、私が経営組織論の分野に入るきっかけをつくってくれた恩人であり、また経済学部の同僚でもあったロジャー・ダウニィ先生が、2007年に若くして亡くなられたことである。

上智大学経済学部の歴史と伝統をつくる事に大きな貢献をされた多くの先人の一人であるダウニィ先生について、私しか知らないことを取り上げ、記録に残したい。

II 出会い

出会いは、突然に、背後からやってきた。

それは、私が大学2年生の夏休み、8月の旧暦のお盆明けのことであった。お盆に郷里の長野県佐久市の実家に帰省していた私は、東京に戻るために、当時の信越本線小諸駅のホームで急行列車を待っていた。その頃、私は体育会陸上競技部に所属しており、帰省中も故郷で練習を続けており、秋に東京で開催される大会に備えるために、練習用具を詰め込んだ大きなバッグを抱えて立っていた。

突然、後ろから肩をポンポンと叩く者がある。振り返って見ると、長身で青い目の、明らかに外国人とわかる人物が、ニコニコと私に笑顔を向けて立っていた。それが、ダウニィさんであった。「こんにちは。あなたは上智の学生ですね」と問いかける。「はい。そうです」と答えると、「私も上智の学生です。私は、あなたを知っています。でも、あなたは、私を知りません」とダウニィさん。続けて、「あなたは真面目な学生です。いつも授業の時、一番前の席で勉強していますね。私は、背が高いので後ろの席でもよく見えます。だから、いつも後ろの席に座っています。私は、あなたを見ることができます。でも、あなたは私を見ることができません。」それが、ダウニィさんとの出会いであった。

そうこうするうちに列車が入ってきて、一緒に自由席車両に乗り込んで、ボックス席に向かい合って座った。「私は、ロジャー・ダウニィです。あなたのお名前は。」「コバヤシ・ジュンジです」、と答えると「ジュンジは、どういう漢字」と聞くので、「順番の順に政治の治です」と答えると、掌に指で文字を書く仕草をし、しばらく考えている様子で、しばしの間があった後、「いい名前ですね」。

それから、列車が上野駅に到着するまで、延々と話し続けた。ダウニィさんが、アメリカ合衆国のコロラド州出身であること、高校の先生の影響でイエズス会に入会したこと、セントルイス大学を卒業して日本に来たこと、鎌倉で日本語の勉強をした後、上智大学に入学したことなど、を話してくれた。私が話したことは、あまり覚えていない。多分、陸上競技のことを、主に喋ったのではないかと思う。そのうち、ふと気づいて、なぜ小諸にいたのかを聞いたところ、小諸駅と山梨県の小淵沢駅をつなぐ小海線の中程にある南佐久郡の小海町の知人が日本のお盆を体験するようにと、ダウニィさんを自宅に招待してくれて、その帰りとのことであった。その質問から話題はお盆のことに移り、盂蘭盆の由来や迎え火・送り火の意味など、詳しく解説されてしまった。

車中の話の中で、ダウニィさんから、「小林君は、来年、どこのゼミに入るの」と聞かれた。「まだ決めていません」と答えると、ダウニィさんが「私は、3年生で高宮 晋先生のゼミに所属しています。素晴らしいゼミです。是非、高宮ゼミに入りなさい」と言う。その場では、「考えてみます」と答えておいた。

III 高宮ゼミ

その後、経済学部のゼミについて調べてみると、高宮先生のゼミが、まさしく私が学びたい分野のゼミであることが分かり、ゼミに入るための面接を申し込んだ。当時の高宮ゼミは、超がつく程の人気ゼミで、なかなか入れていただけないとの評判であった。難関は高宮先生による直接の面接で、その威厳の前に、ほとんど何も喋れないという噂であった。

面接の当日、面接の順番が掲示され、それを見ると、私が一番であった。ドアをノックし、研究室に入ると、高宮先生が眼鏡の奥からジロッと一瞥を与える。緊張しながら学生番号と名前を言って、先生の前椅子に掛ける間、先生は秘書が作成したと思いき書類に目を通していた。やおら顔を上げると、先生は、

「小林君、君は小諸の駅でダウニィ君に会ったんだって」。「はい」と私。「それは奇遇だねえ。ワッハッハッハ」と、先生は呵々大笑。「君、合格だよ。」嘘のような本当の話である。こうして、私は、ダウニィさんのお蔭で、今に至る人生のコースが決まったのである。

ところで、この時、ダウニィさんは、経済学部の学生ではなかった。おそらくは、カトリック司祭になるための準備として、文学部哲学科に所属していた。高宮ゼミには、正式のメンバーではなく、聴講の形で参加していたのではないかと思う。

IV ヒッチハイク

次年度の4月から高宮ゼミに入ることが決まっていた前年度の3月、一学年上の先輩たちと一緒に、伊豆の弓ヶ浜でゼミの春合宿があった。もちろん、ダウニィさんも一緒である。

合宿の最終日、朝食の後、反省会を終え、皆が帰り支度を済ませ、下田駅に出るため、バス停に向かった。すると、ダウニィさんが私の腕をつかみ、「小林君、一緒にヒッチハイクして東京に帰ろう」と言い出した。押し問答しているうちに、あろうことか、一日に何本かしかない下田行きのバスは発車してしまった。ダウニィさんによると、「日本でのヒッチハイクは、外国人だけでは成功しません。日本人だけでも成功しません。外国人と日本人がコンビを組んでやると成功の確率が高いのです。その理由は、外国人だけだと、言葉が通じないのではないかということで、止まってくれません。日本人だけだと、面白くないので、止まってくれません。外国人と日本人が一緒だと、日本人が通訳となって面白い話が聞けるのではないかと思って、止まってくれます」ということだそうである。

それから、何台も車を乗り継ぎ、完全に暗くなった午後9時頃、とうとう東京に辿り着いた。今でも忘れられない、先輩としてのダウニィさんとの思い出である。

V 同僚

その後、ダウニィさんは、哲学科を卒業し、本学の経済学部経済学科に学士入学されました。経済学部を卒業と同時に本学神学研究科神学専攻に進学され、修了後は、さらにアメリカのコーネル大学大学院の経済学研究科に進まれました。そして、コーネル大学で博士号（経済学）を取得後、1985年4月に本学経済学部経済学科の助教授となられた。長いこと会うことができなかつたダウニィさんが赴任してこられ、再会を果たした時、一緒に中華料理を食べに行った。嬉しかった。

この時から、私にとって、ダウニィさんはダウニィ先生になった。

同僚としてのダウニィ先生は、教育者として私が追いかけるべき目標となった。上智大学の教育の真髄は、「キリスト教精神に基づく教育」である。聖職者であったダウニィ先生は、真にそれを実践された先生であったと思う。聖職者ではない私などに及ぶべくもないが、ダウニィ先生亡き後、ダウニィ先生を目標として教育に当たってきたつもりである。

VI 対立

私と先輩としてのダウニィさん、同僚としてのダウニィ先生の関係は、以上に述べてきたようなものであったが、一度だけ対立したことがあった。

現在、経済学部の事務室、教員研究室が入っている2号館の敷地には、かつて旧2号館とL号館があった。現在の2号館建設のために、老朽化した旧2号館、L号館が取り壊された。これも、75周年と100周年の間の25年の間の出来事である。

古い建物が取り壊された後、しばらくの間、そこは空地となっていた。ちょうどその頃、ダウニィ先生

は財務部長を務めておられ、私は学生部長を務めていた。

新棟の建設までの間の空地の有効活用が検討され、有料駐車場としての活用案が提案された。ある日、関係者が空地に集められ、その案についての意見が求められた。図面として示されたその案は、南側は正門からのストリートまで、東側は7号館下の通路に沿う線までとなっていた。計画では、駐車台数が何台で、見込める収益がいくらということが示されてあった。私が学生部長として、一番に問題と感じたのは、現在の2号館前にある櫟をすべて伐採することであった。そうでなくても学生生活にとって手狭な四谷キャンパスで、一時的とはいえ、ベンチをおいて憩う場所もない状態にすることには大きな抵抗を感じた。せめて図面に描かれた計画の駐車スペースの一行分を削って、櫟を残し、ベンチを設置して、学生が憩う場所を確保したいと思った。また、7号館側についても、駐車場はせめて7号館の西側の面までにとどめてもらい、掲示板の設置スペースを確保する必要があるとの意見を述べた。

それに対し、強硬な反対意見を述べたのが、ダウニィ財務部長であった。理由は、当然のことながら、駐車場スペースを削る事は、収益の減少につながるということであった。このことについては、親しい間柄ではあったが、相当に激しくやり合った。その時のダウニィ財務部長が頑なであったのは、財務部長の職責に忠実であったがためであろうと思う。実に真面目な人柄であった。

その後、ある方の仲裁もあり、この問題は決着した。結局は、櫟を残すこととなり、7号館側も駐車場を縮小していただいた。その決定がなされた数日後、11号館の研究室前の廊下で会った時、ダウニィ先生はいつもの笑顔で挨拶してくれ、それまでとまったく同じように私に接してくれた。

今、正門からキャンパスに入り、大きな櫟の木を見上げるたびに、ダウニィ先生の事を思い出す。

VII 別れ

実に悲しい、私にとって辛い別れであった。特別研修中に研究のために中国に渡り、そこで病を得て帰国されたダウニィ先生は、懸命の闘病にもかかわらず、2007年12月26日に逝去された。生前に、上智大学から名誉教授号が授与された。

亡くなったのは、63歳という若さであった。ダウニィ先生を目標としてきた私も、すでにその年齢を越えた。

VIII 思うこと

楽しかった経済学部でのこの25年間のうちで、私の記憶に鮮明に残っている数少ない悲しい出来事のうち、故ロジャー・ダウニィ名誉教授との思い出を取り上げた。

それにつけて、ダウニィ先生が亡くなられてから、折に触れて考えさせられてきたことは、今ある自分は、ダウニィ先生との小諸での出会いをきっかけとして、高宮ゼミに入ることから始まっている。上智大学経済学部の教育の最大の強みはゼミにあると思う。信越本線の電車の中で、ダウニィさんがゼミについて熱く語っていたのが思い出される。

正式には「演習」という科目であるゼミは、要件を満たせば単位が付与され、形式上は他の科目と何ら変わりはないように見えるが、実体は他の授業とは全く異なるものである。そこでは、人間が育てられる。そのことを私に教えてくれたのは、ダウニィさんである。

上智大学経済学部の伝統は、ゼミによってつくられてきたといっても過言ではない。ゼミの伝統を継承し、さらに発展させていくことは、ダウニィさんの遺志でもあろうと思う。今後も、上智大学経済学部は、ゼミをカリキュラムの中心に据え、大切にしていってほしいものである。

最後に、天国でこの拙文を読んだダウニィさんは、「そうだったね」と言ってくれると思う。